八線能人名

拍詞解說

枕詞辞典

大塚龍夫著

風間書房刊

昭和21年7月10日 印刷
昭和21年7月15日 發行

枕詞辭典

(檢)定價二十五圓

著者 大塚龍夫

千葉縣市川市北方一五二
發行者 風間歳次郎

東京都神田區神保町三ノ二九
印刷者 長苗三郎

發行所 風間書房
千葉縣市川市北方一五二
出版會員番號A一一一〇五番
振替東京二三六七三番

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

東京・神田・明和印刷株式會社

凡例

一、本書は、前篇と後篇との二部から成り、これによつて枕詞の由來の説明と檢索とをはからうと志したものである。

一、前篇は、凡そ八百四十二の枕詞について、まづ枕詞そのものを掲げ、その枕詞が修飾するあらゆる場合の語を擧げて、その由來なり理由なりを説明し、且つその用例を古歌によつて示した。例歌の中で枕詞の次に○○を附けてある語が上の枕詞によつて修飾せられた語である。

一、右は、例へば「あきつしま」といふ枕詞の用法を知らうとするならば、その語の條を見れば、この語が『やまと』にかかる語であつて、その由來の説明と共に萬葉集卷一にある歌を用例として擧げてあるのを見出すであらう。また「うばたまの」といふ枕詞についていふならば、これは『黑』また『黑髮』『黑髮山』にかけていひ、また『夜』『夜半』『宵』にもかけていひ、更に『夢』にもかけていふことがわかり、その由來の説明と共に用例を一々に見ることが出來るのである。

一、一つの枕詞の修飾する語が、數語又は十數語に亙る場合は、例歌の排列はその枕詞によつて修飾せられる語の説明乃至列擧の順序に從つた。

一、例歌の所載歌集の書名は、卷數のあるものはなるべく書名を二字に略記して卷數を併記し、やむを得ぬものは三字として卷數を併記した。また短い書名で、卷數の無いものは、そのまま擧げた。

例へば、

萬葉集卷十二　〔萬葉一二〕　新後拾遺集卷十一　〔新後拾一一〕
古今集卷一　〔古今一〕　新續古今集卷八　〔新續古八〕
後拾遺集卷三　〔後拾三〕　古今和歌六帖卷二　〔六帖二〕
續後撰集卷五　〔續後撰五〕　貫之集卷一　〔貫之集一〕
續後拾遺集卷六　〔續後拾六〕　源順集　〔源順集〕
新千載集卷十四　〔新千一四〕　永正百首　〔永正百首〕

の類がそれである。また、書名或はその卷名等も、右の歌集に準じてこれを略記した。

古事記上卷　〔古事記上〕　日本靈異記上卷　〔靈異記上〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

日本書紀神代卷　〔神代紀〕　土佐日記　〔土佐日記〕
日本書紀神武天皇卷　〔神武紀〕　大和物語　〔大和物語〕
源氏物語桐壺卷　〔源氏桐壺〕　源氏物語末摘花卷　〔源末摘花〕
濱松中納言物語　〔濱松〕

一、後篇は、各種の語につき、それらを修飾する枕詞を列擧したもので、上段に記した語について、その枕詞を下段に求めることが出來る。

一、右の求め方は、例へば『朝日』といふ語にかかる枕詞を求めたいといふ場合には、上段に『朝日』といふ語のある頁を開き、その語の下を見れば、そこに「あかねさす」といふ語があつて、これが『朝日』の枕詞であることを示してゐる。また『日』にかかる枕詞を求める場合には、上段に『日』といふ語の記載されてゐる頁を開き、その下を見れば「あかねさす」「あからひく」「あまづたふ」「あまてるや」「あめなる」「あめなるや」「たかてらす」「たかひかる」「たまかぎる」「まきさく」といふ十語があつて、これがいづれも『日』にかけていふ枕詞であることを示してゐるのである。もし和歌を詠む場合に、これを求めたのであるならば、右の中のいづれか適當の枕詞を使用すれば

よいのであつて、萬一その使用に不安がある場合には、前篇について、それぞれの枕詞の條を見れば、その點は容易に解決出來る。

一、本書の排列はすべて五十音順により、また使用の假名遣は、古語の性質上すべて歴史的假名遣によつた。

後篇

あ……一
い……三
う……五
お……七
か……九
き……一一
く……一三
け……一三
こ……一三
さ……一四
し……一五
す……一六
せ……一七
そ……一七
た……一七
ち……一九
つ……一九
て……二〇
と……二〇
な……二一
に……二三
ぬ……二三
ね……二三
の……二四
は……二四
ひ……二五
ふ……二六
へ……二八
ほ……二八
ま……二九
み……二九
む……三一
め……三二
も……三三
や……三三
ゆ……三三
よ……三四
わ……三五
ゐ……三六
ゑ……三六
を……三六

目次

前篇

あ……三
い……四二
う……五六
お……六九
か……七八
き……九三
く……九六
け……一〇三
こ……一〇四
さ……一一二
し……一一九
す……一五〇
せ……一五三
そ……一五四
た……一五五
ち……一七九
つ……一八〇
て……一九〇
と……一九〇
な……一九五
に……二〇六
ぬ……二一〇
ね……二一二
の……二一三
は……二一三
ひ……二一九
ふ……二三五
へ……二四〇
ほ……二四〇
ま……二四一
み……二五二
む……二六六
も……二六九
や……二七六
ゆ……二八六
よ……二九一
わ……二九三
ゐ……二九九
を……三〇〇

前篇

〔あ〕

あがこころ〔吾が心〕

わが心清しといふ意から『清隅』に、心赤しの意から『明石』に、また心を盡すの意から『筑紫』にかけていふ。

萬葉一三　みはかしを……あがこころ清隅の池の池の底われはしぬばず……

萬葉一五　あさされば……あがこころ明石の浦に船とめて浮寢をしつつ……

萬葉一三　大君のみことかしこみ……あがこころ筑紫の山のもみぢ葉の……

あかねさし〔茜指し・赤根指し〕

次項と同語、『照る』にかけていふ。

萬葉四　大伴のみつとはいはじあかねさし照る月夜にただにあへりとも

あかねさす〔茜指す・赤根指す〕

朝日の赤くかがやくを茜の色に喩へて『日』（『朝日』）にかけ、轉じて『晝』にかけ、色彩の上から『紫』にかけ、また形の照りかがやく意から『君』にかけていふ。「さす」は色のさし出づるをいふ。

萬葉二　あかねさす日はてらせれどぬばたまの夜渡る月の隱らく惜しも

新古七　あかねさす朝日の里の日影ぐさとよのあかりのかざしなるべし

萬葉一五　あかねさす晝は物思ひぬばたまの夜はすがらにねのみし泣かゆ

萬葉一　あかねさすむらさき野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖ふる

萬葉一六　飯くへどうまくもあらず歩けども……あかねさす君が心し忘れかねつも

あかひもの〔赤紐の〕

古への神事裝束の小忌衣の肩につけた赤紐は長いものであつたから『長し』にかけていふ。

新勅九　山藍もて摺れる衣のあかひものながくぞわれは神につかふる

あかぼしの〔明星の〕

同音を重ねて『あく』（『明く』『飽く』）にかけていふ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

萬葉五　世の人の……あかぼしのあくる朝はしき妙の床のへさらず……

實國集　あかぼしのあかでいでにしあかつきは今宵の月に思ひ出でずや

あからひく〔赤羅引く〕

赤くにほふの意から『日』『朝』にかけ、赤みの映すといふ意から『子』（女子）『膚』にかけていふ。

萬葉四　おしてる……あからひく日も暮るるまで嘆けども……

萬葉一一　ぬばたまのこの夜な明けそあからひく朝ゆく君をまてばくるしも

萬葉一〇　あからひくしきたへの子をしば見れば人妻ゆゑにわれ戀ひぬべし

萬葉一一　あからひくはだもふらずて寢たれども心を異にはわがおもはなくに

あきがしは〔秋柏〕

諸説があつて詳かでないが、代匠記には秋の柏は夜霧朝露に潤ほふものゆゑ『潤和川』にかけていふとある。

萬葉一一　あきがしは潤和川邊のしぬのめの人にしぬべば君にたへなく

あきかぜの〔秋風の〕

風の縁で『吹く』（『吹上』『山吹』）にかけ、また風の古言『ち』にかけてもいふ。

古今五　あきかぜの吹上に立てる白菊は花かあらぬかなみのよするか

萬葉九　あきかぜの山吹の瀬のとよむなべ天雲かけり雁わたるかも

萬葉一一　あきかぜの千江の浦まのこづみなすこころはよりぬ後は知らねど

あきぎりの〔秋霧の〕

霧の縁から『たつ』にかけ、霧の立ちこめた時は思尺を辨ぜず、心のはれぬものゆゑ『はるるときなく』『おぼつかなし』にかけ、また霧の立つたのは垣のやうに見えるので『まがき』にかけていふ。

後撰七　あきぎりの立野の駒をひく時は心にのりて君ぞこひしき

拾遺三　あきぎりのたたまくをしき山路かな紅葉の錦織りつもりつつ

古今一二　あきぎりのはるるときなき心にはたちゐの空も思ほえなくに

風雅九　旅ごろもはるかに立てばあきぎりのおぼつかなさをいかにながめむ

新續古五　あきぎりの籬の島の隔てゆゑそことも見えぬちかのしほがま

あきぐさの〔秋草の〕

上古、草を結んで互に心の變らぬことを契る習俗があつたので、『むすぶ』にかけていふ。

萬葉八　かむさぶといなにはあらずあきぐさの結びし紐をとかば悲しも

あきつしま〔秋津島〕

都の名をその國名にかけたもの。『やまと』にかけていふ。秋津島は大和國南葛城郡秋津村の地で、孝安天皇の都し給うた地。

萬葉一　やまとにはむら山あれど……うまし國ぞあきつしまやまとの國は

あきつばの〔蜻蛉羽の・秋つ葉の〕

蜻蛉の羽の如く薄く涼しい夏衣に喩へたものとも、秋の紅葉の如くに美しいものともいふ。『袖』にかけていふ。

萬葉三　あきつばの袖ふる妹をたまくしげおくに思ふを見たまへわ君

あきのたの〔秋の田の〕

秋の田の稻穗の「穗」から轉じて『秀』にかけ、稻と同音なる『往ね』にかけ、また稻を刈るとい

ふことから『かりそめ』にかけていふ。

古今一一　あきのたのぼにこそ人を戀ひざらめなどか心に忘れしもせむ

後撰九　あきのたのいねてふことをかけしかば思ひいづるが嬉しげもなし

後撰一二　あきのたのかりそめぶしもしてけるかいたづらいねを何につまましし

あきのはの〔秋の葉の〕

紅葉の照りにほふことから『にほひ』にかけていふ。

萬葉一九　古にありけるわざの……あきのはのにほひに照れるあたら身の……

あきのよの〔秋の夜の〕

秋の夜は長いものであるから『ながき』にかけていふ。

古今四　きりぎりすいたくな鳴きそあきのよの長き思はわれぞまされる

あきはぎの〔秋萩の〕

萩は枝がしなひ撓むので『しなひ』にかけ、又色がうつりやすいので『うつる』にかけ、秋野の花の中では萩が最も賞美されるので、秋萩の花といふ續きから『花野』にかけていふ。

萬葉一〇　いささめに今もみがほしあきはぎのしなひにあらむ妹が姿を

古今一五　吹きまよふ野風をさむみあきはぎのうつりもゆくか人の心の

萬葉一〇　あきはぎの花野のすすき穂にはいでずわが戀ひわたるこもり妻はも

あきやまの〔秋山の〕

秋、滿山の紅葉によつて木の下が自ら紅に映えるので、下映の義から『したび』『したべる』にかけていふ。

萬葉一〇　あきやまのしたびがしたに鳴く鳥の聲だに聞かばなにか嘆かむ

萬葉二　あきやまのしたべる妹なよたけのとをよる兒等は……

あくたびの〔芥火の〕

頭音を反復して『あく』にかけていふ。

拾遺一五　ほのかにもわれをみしまのあくたびのあくとや人のおとづれもせぬ

あけごろも〔朱衣・緋衣〕

頭音を反復して『あけ』にかけていふ。

後撰一五　うばたまの今宵ばかりぞあけごろもあけなば人をよそにこそ見め

あさがすみ〔朝霞〕

霞の立ちこめた時は物がはつきりと見えぬので『ほのか』にかけ、また霞は幾重にも立ち重なるものゆゑ『八重山』にかけ、また假庵などから立ちのぼる煙は霞に似てゐるので『かびや』にかけ、また霞の張るといふ緣から『春日』にかけていふ。

萬葉一二　きりめ山ゆきかふ道のあさがすみほのかにだにや妹にあはざらむ

萬葉一〇　あさがすみ八重山越えてよぶこ鳥鳴きやながくるやどもあらなくに

萬葉一〇　あさがすみかびやがしたに鳴くかはづ聲だにきかばわれ戀ひめやも

萬葉一〇　あさがすみ春日の暮は木の間よりうつろふ月をいつとか待たむ

あさがほの〔朝顏の・槿の〕

朝顏の美しさの目にとまることから、あらはの意で『ほ』にかけていふ。

萬葉一〇　ことにいでて言はばゆゆしみあさがほのほには咲きでぬ戀をするかも

あさがみの〔朝髮の〕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo